

【研究ノート・資料】

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

— 基礎調査の試み(1) —

大 澤 隆 幸

年表スタイルで時間順に記述する。そのため、焼津から、と掲げたものの、焼津関係はしばらくは出てこない。いわば、助走部分——八雲が焼津に来る以前——があって、それから飛び跳ねる幅跳びとか三段跳びのようである。助走のない幅跳びは考えられないように、本稿での来日以前、来焼以前は、ハーン・八雲と焼津のつながりの理解に必要なことである。分量が多くなったので数回に分ける。

[1] 序

焼津：八雲が来た明治30年頃の焼津という漁村は貧しく平和で、人口がふえかかってにぎやかだった。都会からやってきた八雲のような人間を、「^{ウェーヴス}波浪と^{サンビームズ}日光」(一雄327) が待っていた。

漁業：昔の焼津はほとんど農地がなく、人々は海へ追い立てられていたが、次第にそこに伝統が生まれてきた。主な産業となった漁業は、関係者が協定を結んだり、組合を結成したりした。船員として家族や親戚の者たちが組んで乗り込んでいた。それが、次第に身内外の者が加わり、出漁する状況になってきた。漁船の動力でも人力・風力に頼っていた時代から抜けて機械化へと移ってきた。

災害：八雲が親しみ愛した焼津の海は、人々の生活の根拠地であった。しかし、そこはまた恐ろしい遭難事故の元でもあり、昔から海から来た災害、海岸浸食、激浪と切り離すことができなかった。堤防建設の歴史が海との戦いを示している。焼津の神社や寺院は船乗りの信仰をあつめていた。気象の知識のない時代であっただけに、神仏にすがらざるをえなかったのである。

八雲にとって：焼津は八雲にとってまず水泳のためのところである漁業の町である。日本の古層である古い共同体意識が時折現れている場所でもある。八雲は民俗学

的関心から観察し記述している場合があり、そういう時は彼の関心の広さが示される。

八雲は、焼津に来る前にさまざまな体験をし、それらの記憶を引きずってきている。彼が焼津で体験することは、その人生で初めてのこともあったものの、多くは、それまでの新聞記者活動、作家活動で体験し、考察し、作品化していた事柄である。そこで、焼津時代の体験と以前のそれでは、どんな点がどのように変化し、作品化されているかが重要である。

作品：八雲が焼津を取り上げたり、また焼津を関連させていると思われる作品は一種のフィールドワークの産物である。だが、それらの作品は松江、熊本時代や東京での作品ほどは知られていないのではなかろうか。その理由はどういうことだろうか。焼津の名が直接言及される作品が少ないだけでなく、関連しても焼津とは分からないこともある。「焼津にて」（『霊の日本』所収1899）、「乙吉のだるま」「漂流」「海辺にて」（『日本雑記』1901）では焼津の名が出てくるが、「夜光るもの」（『影』所収1900）にはない。この他にも焼津関連は種々ある。

焼津時代は八雲の最後期に当たり、焼津が出てくる（らしい）作品はそれまでの集大成の感があり、必ずしも理解しやすいものではない。特にそれは瞑想的、思索的エッセーにその感がある。

この時期は大学での講義で忙しかった。また、焼津の他に出かけず、以前のように現地体験に基づいてではなく、文献に頼って再話するという形式の創作を行っていた。焼津体験が創作に反映しているとすると、可能性は明治30年初来焼以降の作品になる。それらは以下のとおり。

1898 明治31年12月8日。『異国情緒と回顧』。

1899 明治32年9月26日。『霊の日本』。

1900 明治33年7月24日。『影』（『明暗』とも訳される）

1901 明治34年10月2日。『日本雑記』

1902 明治35年10月22日『骨董』。

1904 明治37年4月2日。『怪談』。9月日付不詳「日本——一つの解明」

1905 明治38年10月18日。『天の川縁起その他』

なお、『日本お伽話』シリーズのものである、「猫を描いた少年」1898「土蜘蛛」（「お化け蜘蛛」とも訳される）1899、「団子をなくしたお婆さん」1902、「ちんちん小袴」1903、「若返りの泉」1922は、上記の作品とは別扱いすべきものである。

小泉八雲と焼津：この関わりはどのようなものだったのかを知ることは、八雲の焼津関連の作品を理解する上で大いに役立つに違いない。しかし、焼津における八雲の日

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

常と関連作品は、一部の八雲愛好家以外にはあまり知られてはいない。筆者は、焼津港にある焼津漁業資料館で、八雲らが体験し、一雄が詳しく記述した大鮪騒動の資料はないものかと窓口で問い合わせたところ（2002年5月）、船から浜へ下ろされた鮪を見たのではないかとと言われて少しがっかりした。しかし、あの海岸での大騒ぎをリアルに記述している文献・資料は、一雄の憶い出以外にあるのだろうか。ぜひ知りたいものだ。

八雲の姿勢：彼が日本を愛したことは否定すべくもない。彼が帰化したことは自分の死後に遺族に遺産を残してやりたいという気持ちから法的に対処したにすぎない。帰化して法律上日本人になっていたとはいえ、そのメンタリティ、物の考え方あるいは価値観は依然として非日本的な性格を持っていたのではなかろうか。このことは既に指摘されている。「一般に書簡から窺われる八雲は、日本関係の作品のみから知られる八雲より、はるかに西洋人であることは、私たちが八雲を理解しようとする場合、重要なポイントです」（「八雲」12・18）。

すると、八雲をめぐる人々との間に誤解が生じることもあっただろう。異なる文化を背景にして人々が交渉すると、理解と誤解の間でさまざまな問題が生じる。焼津と八雲の関係においてもそういうことは考えられる。文化交渉の諸問題を検討できるこの出会いは、現代的問題でもある。

問題点：八雲と関係した人々は必ずしも善良な人々ばかりではなかった。人は時には欲深な面を見せたり、卑劣な行為をしたりするものである。それは焼津でも変わらなかった。だから八雲は焼津の人々の良くない面も観察している。八雲が焼津を讚えているからといって、八雲に傾倒し、賛美し理想化するあまり、焼津の否定的側面への言及を忘れてはならない。しかし、そういう人々と出会っても八雲は焼津の人々の良いところを見ることを忘れず、作品や書簡に残しておいてくれた。

八雲と焼津を考える際には、八雲が焼津に関して、あるいは焼津からヒントを得て書き残した作品が中心に来なければならない。そのときには、当時の焼津がどういうところであったのかを理解する必要がある。八雲は、彼の目を通して、周囲の人々との交渉を介して焼津についての情報を得た。それらの情報の基になっている焼津の姿が、八雲の焼津観を理解する上で必要になる。

八雲と焼津の関わりを論じたものはすでにある。残念ながら、名著として評価が高いものの細部では問題がある^{たなべ}田部隆次『小泉八雲』（大正3年）に依拠していたりするため、必ずしも正確な記述でないところも時々見られたり、互いに矛盾する記述があったりする。問題のある第一書房版全集を利用せざるをえないこともある。記憶違

い、写し間違い、読み間違い、聞き間違い、誤植、間違っただ情報をそのまま受け取るなどなど。

資料：そこで、一般に手に入る資料（作品、手紙、関係者の思い出、研究書、現地調査）を用いて、焼津での八雲の生活ぶりを年表形式で再現しようと試みる。その際に八雲の体験と共通性を持つ他の関係にも目配りし、来焼以前、来日以前の八雲の行動にも注目する。なお、テーマ限定による年表形式のこの種の試みは、たとえば、黒田が行っている。

焼津と八雲の関わりを理解する第一の資料は、八雲にいつも同行して来焼した一雄の「父八雲をく憶ふ」（1931）である。これはきわめて生き生きと八雲の日常を描いている。細部での記憶違いはあると思えるものの重要な作品である。次に、妻セツの「思い出の記」である。そして家族や知人と相互にやりとりした手紙である。「人によると、手紙では自分の本心をあまり出したがらない。しかし八雲は、さういふ種類の人物ではなかつた」（エスプリ138）という評価は、これを正当化する。

第二は、このテーマを取り上げてきた研究者の成果である。多くの研究書は、当然であるが焼津体験を八雲の伝記全体に溶け込ませ、全体との関係で焼津の意味を考察している。恒文社版ハーン著作集の年譜、坂東氏による英潮社版ハーン年表、小泉八雲事典がそうである。焼津を知る者、焼津に住む者に、あるいは焼津と八雲の関係に関心を持つ者にとってはもの足りない。

それらの中であって、小泉八雲顕彰会関係者の労作は実に貴重である。ただし、この場合にも「地元の人を書くものはそのまま踏襲される懸念も」（へるん25・53）あるので、裏づけ作業や根拠の確認が必要になることがある。未刊行書簡（1991年刊行）の一部は、八雲と焼津の初めての直接の接触を語っていて重要であるが、どうやら、この刊行前の研究者はこの経緯を各種の研究書から間接的にしか知ることができなかったようだ。本稿ではその写真版を利用できた。

第三は、明治期の焼津を証言する郷土資料である。八雲と焼津の関りに関心をもって取り組んでいる方々はこれらをよく精査している。ただ、惜しいことには、——どうしてなのか——明治期の静岡県、焼津関係を証言し、人々の日々の暮らし振りを報じている新聞が資料としてあまり用いられていないようである。

手紙について：メイスンへ宛てた1892 明治25年8月初旬（日付不詳）のハーンの手紙がある。熊本在住のハーンが、隠岐への旅行の途次神戸で書いたもの。途中の奈良、京都のことを記した後で、「あのすてきな西海岸がなつかしい（…）またあそこには随分風変わりな神が二三おいでなさるが、それについては全然筆を執るまい、日

本人にたいして穏やかでないことを述べては悪いから」(Japanese Letters 411)。

率直に意識的自己規制を表明している。また、人は他者との関りでは無意識のうちにも自己規制を行っているとも考えられる。「ヘルンのやうに孤独の生活を送って居る者につては、手紙を書く事は談笑であり、放言高論であり気休めであつた。こんな時には何人も深く愛して居る人や物に対して、心にもない罵倒をする事がある。これは自分だけに許されてゐる特権と考へてゐるから他人が云へば憤るのである。発作的興奮の時に書いた書簡の文句が大げさに伝えられて米国加州では排日の材料に使はれた」(田部371)。

だから、ヘルン書簡をコンテクストを無視して単独でとりあげると、一時的興奮によるゆがみをそのまま引き写す恐れもあるので、さまざまな関連によってゆがみの調整が必要になる。したがって、手紙に現れた言葉を執筆者のすべて、あるいは全面的に真意が書き記されていると考えるわけにはいかない。さらには、何をどう書くかは相手との相互関係において決まることなので、その点では、会話と同じである。ここでは真実がさまざまな度合い、濃度において屈折して表現される。手紙を単独で取り上げるだけでなく、他の手紙や会話、作品に表れた作者の姿と重ね合わせ、関連付けることによって、信頼性、真実性の度合いを高めることができるだろう。

方針：焼津体験と共通点をもつ事項をピックアップするには、その基本方針、原理、節度、範囲を定めなければ、途方もなく広がるだけでなく、無秩序であろう。何をどのようにどれほど取り上げるか(内容、表現、分量など)。年表形式で記述するには、出来事の時期(太陽暦を用いる。必要に応じて陰暦を記す)確定が必要になる。そこで、下記のような柱を建ててみた。

しかし、年表形式を取るものの、必ずしもそれにこだわらず、関連情報を入れ、執筆者の私見を盛り込んだ(引用文は文字通りそのまま引用しなければならないのだが、写真版でないかぎりそれは厳密には不可能であり、意味を損なわない範囲で時には新漢字、新かなづかいに直したこともある)。このような基礎的調査の後には、焼津体験が彼の作品にどう生かされているかが、次の研究課題にならねばならない。

- 1 八雲は焼津で何をし、何を体験したか。その時どういう理解や誤解があったか。作品、土地の人々、障害者、小動物、特に猫、虫、食への関心、水泳、伝統行事、登山、宗教、風俗、習慣、災害、産業、交通などを手がかりにする。
- 2 焼津でとそれ以前に八雲が体験したことへの対応にどんな共通性、どんな特色が見られるか。トラブルに出遭った時はどうであったか。焼津以前、特に来日以前で

- は、日本に来ての著作につながりそうな記事や手紙を取り上げる。
- 3 八雲の作品で焼津がどう描かれているか。創作の不振を伝える彼の手紙は、この時期の作品とどのように関連づけられるか。
 - 4 関係者の証言、それらを裏付ける資料調査があるか。焼津での八雲関係文献に見られる細かい数字などでの不一致、間違い、解釈の違いを指摘し、間違いだとする合理的根拠を示すとともに、興味深いエピソードの時期確定。
 - 5 明治期の焼津はどういうところだったのか。
 - 6 八雲亡き後の焼津、とくに小泉八雲顕彰会の活動とそれに対する市民の反応はどういうものだったか。そこに焼津特有のものがあるか、それらの反応はどこにでも見られる一般的な性格のものか（来日以前に関する場合は西暦を太字、そうでない場合は和暦を太字にして表記する）。

[2] 焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

安永年間以前。焼津海岸に二条の護岸堤防と一つの河川があった。海岸には幾多の松（市誌上4ページ、漁業史188ページ。以後ページは数字だけで示す）。

1772 安永元年。護岸堤破壊。安永年間以来、焼津海岸にある波除堤防は、まったく簡易な杭木工事であった。そのため、激浪が襲来すればすぐ壊れ、跡形もなくなった。怒濤は家屋を倒壊し、人畜を傷つけ、財産が失われた（「八雲」11・21）。海岸付近の人々は荒天のたびに恐れおののいていた。通常の神経の持ち主でも耐えられないほどの恐怖を覚える激しさである。このような状況は、八雲来焼時に至っても変わっていない。

1784 天明4年。護岸堤被害（市誌同）。

1797 寛政9年。激浪のため壊される（市誌同では寛永九年）。

1803 享和3年頃（市誌4では享保三年頃。わずかに残った一条の河川は堤防とともに全く痕跡を消す）。

1815 文化12年。この頃から海浜はますます減少（市誌同、漁業史188）。

1824 文政7年。ヘンリー・ワトキン。英国に生まれる（事典701による。絵入19では1825年頃生まれ）。経歴は定かでない。

ギリシャ時代 1850・6・27～1852・7頃

1850 嘉永3年。6月27日(木)。パトリック・ラフカディオ・ハーン生まれる。この年には、ピエール・ロティ（1月14日月曜日）、モーパッサン（8月5日日曜日）、

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

バジル・ホール・チェンバレン（10月18日金曜日）、ロバート・ルイス・ステューブソン（11月13日水曜日）が生まれていて、ハーンにとってみな重要な人ばかりである。「父は私に、父自身の幼時の種々の思い出話をしばしば聴かせてくれました。あんなに辛い苦しい呪われた前半生を持っていた父が、でも幼時の思い出を話す際には、楽しい楽しい夢話でもするように如何にも昔が恋しいらしい様子でした。（…）しかし父はその余りに多く持っている種々様々の過去を——ほとんど辛酸で塗り潰された過去を——思い出すまいと努力している人でした」（一雄62）。

1851 嘉永4年。焼津城ノ腰に清水庄七、よ志の居酒屋下田屋創業。後の下田楼（現在の焼津ホテル）へと発展する。

アイルランド時代 1852・8・1～1862頃？

1856 安政3年。8月10日（日）。「チータ」の舞台になったデルニエール島（ラスト島）が、作品ではこの日にハリケーン、高潮に吞まれて全滅する。

10月3日（金）。山口乙吉、父山口庄助、母しげ（北山1・22では「しけ」とも）の二男として益津郡城之腰村四百一番地で生まれる。乙吉が後年借りることになる家は二百六十三番地。

1857 安政4年。1月初旬（年表推定）。ハーンの両親正式離婚。ハーン7才は大叔母サリー・ブレナン Brenane の下へ。これは両親の不和、家庭の崩壊、そして母との生き別れである。精神的に強い影響を与え、生涯の間残ったショックの第一である。

1858 安政5年。6月27日（土）。8才の誕生日。祖母の妹「ブレーネン大叔母の許に居た間は年々誕生日には御馳走され、蠟燭を立て、祝つて貰つた。それで六月廿七日が自分の誕生日である事をよく記憶している。誕生日が済むと間もなく海岸へ大叔母に連れて行かれるのが例であつた。悪戯をすると誕生日に御馳走してやらぬぞとか、海岸へ連れて行つてやらぬぞと云われるのが一番嫌だった」と一雄らは聞かされた（一雄2・91）。

夏。海が好きだったブレナン夫人に連れられてトラモア（ウォーターフォード郡）の別荘を訪れて海水浴をしたり、バンゴール（ウェールズ、ダンモア州）の別荘地、コング（メイヨー郡）の農園を訪れたりする。

この大叔母は、「年配でそれまで子どもを育てたことがない」（河島13）人で、「悪夢の感触」の一節が示すように、めったに名前を呼ばれることがなく、ラフカディオは単に「子ども」とだけ言われていたというのであるから、一人の人間

とは見られていなかった。

1859 安政6年。7月11日夜（ただしこれは陰暦であると考えられる。太陽暦では8月9日火曜日）。天野甚助19才。福壽丸に乗船し勢州沖で遭難。甚助の板子には、寺の御詠歌の左脇に「安政六年己未 {つちのとひつじ} 七月十一日 福壽丸勢州沖ニ於テ難船ス日夜地藏尊ヲ念ズ斯板ニヨリ海ニ居リ三日間旭日昇天頃播州船ニ助カル刻シテ記念トス 焼津 天野甚助」（新村217）とあったというが、2002年現在では消えてしまい白い状態になって見えない。また事典18では「七月」が抜けている。13日（太陽暦では11日木曜日）朝。甚助救助される。作品「漂流」では、遭難の年（1860万延元年に）、場所（紀州沖に）、漂流時間（二日二晩に）、救助時間（夕方日没時に）などが変えられている。なお、明治33年8月の項参照。

1862 文久2年。善左エ衛門が黒石川縁に「枕流亭」の前身「鰻屋」を創業。

イギリス・フランス時代 1863?～1869初夏頃。

1864 文久4年元治元年。6月9日(木)。山口乙吉の妻きせ生まれる。

乙吉が天野家から借りた家は「元治元年・1864以前と推定される」（太陽59）。「元治元年十二月」（北山1・18）と記されている、現存の隣地借用の証文では、建物のことは分からない。そのためか、北山1・18では「百年以上経っている」と推定したり、「明治初年」（同1・18）「明治中期以前」（同2・140）とかある。

1866 慶応2年。月日不詳。16才のハーンは英国セント・カスバート・カレッジ（アショー・カレッジとも言う）での怪我で左眼を失明する。障害者になる。

1867 慶応3年。10月28日(月)。同校退学。大叔母が親戚の者のそそのかしで莫大な財産を失い、学費を払えなくなる。ハーンは突然無一文になり、彼の生涯で精神的外傷（トラウマ）として残るほどの衝撃になった。ハーンにとって**第二のショック**である。

1868 慶応4年。2月4日(火)。小泉セツ生まれる。

夏。この頃のハーンの思い出。「二十五年も前のある夏の夕べ、ロンドンの公園で一人の少女が通りがかりの人に、『Good-night』 {こんばんは、おやすみなさい} というのを聞いたことがある。『Good-night』というただの一言だった。その娘が誰かも私は知らない。顔さえ見なかった。その声をふたたび聞くこともなかった…」（「門づけ」）。

9月8日(火)。明治元年布告726号で改元。何月何日からという考え方はない。

アメリカ時代 シンシナティ時代1869初夏頃～1877・10

1869 明治2年。この年初夏の頃。渡米。移民列車で五日かけてシンシナティに向か

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

う。満員の三等車、一文なし、水以外丸一日半何も食べていない19才のハーン。向いの席に坐った、民族衣装をまとったノルウェー少女が黒パンとチーズを恵んでくれる。お礼を言うのを忘れ、むさぼり食い、その後何か口ごもり、誤解されて彼女を怒らせる（「私の最初のロマンス」 Bisland 1・45）。

この年後半から翌年にかけてワトキンと出会っている。このような会話だったのでろう。「大鵜からの手紙」や「詳細年表」から構成してみる。

ワトキン「ところで、君、どうやって食べていこうと思っているのかね」

ハーン「分かりません」

ワトキン「何か手仕事ができるかね」

ハーン「いいえ」

ワトキン「いったい何ができるのかね」

ハーン、熱っぽく「はい、文章が書けます」

ワトキン「ふーん、何か食べていける職を身につけることだな、書くことはもっと後にしたほうがいいな」

M・アトキンソン宛1893年1月10日付書簡（へるん27・95）では、

ワトキン、笑いながら「君はまだ何も知らんだらう。でも、私が教えてやろう。うちの店（オフィス）で寝ればいい。印刷を教えよう。給料は出せんよ。君は話し相手にしか役に立たんからな。でも、食事は出してやる」。

1870 明治3年。公立図書館に通って読書、物語書き、牧師トマス・ヴィカーズの私的秘書としてフランス語の翻訳、また「フィアット・ルクス」の名で週刊誌に投稿。

1871 明治4年。ブレナン夫人死去を知らせるモリヌーの手紙を受け取る。受け取るはずの遺産は届かず、以後アイルランドの親戚とは絶縁。

1月12日（金）。**小花清泉**（本名は貞三）が静岡県、現・藤枝市で生まれる。後の八雲の教え子。

1872 明治5年。2月1日。前年4月4日に太政官布告で出された戸籍法が、この日から施行。明治5年式戸籍で壬申戸籍ともいう。

夏以降（月日不詳）。下宿の台所で働く料理女**マティ・フォーリー**（本名アルシア・フォーリー）と知り合い、次第に恋する。「この時期ハーンが約束をかわした不幸な結婚も、{ハーン自身の} こうした**肉体的な欠点**を意識すればこそその結果であったというのが、ワトキンの説である」（マレイ90）。

9月12日（木）。新橋・横浜間に鉄道開設。鉄道は富国強兵、殖産興業の政策のために重視されただけではなく、軍事・警察の輸送手段としても必要とされた（明治10年

の西南戦争、明治17年の秩父事件で役立った)。

11月9日(土)。太政官布告337号(改暦の布告)により、天保暦に代わり太陽暦が採用される。焼津地区では焼津神社祭礼と盂蘭盆会が重なるので、各家庭で後者を陰暦で行うか新暦でおこなうかが、やや問題になる。

11月。この頃からインクワイアラー紙に記事が載るようになる。

彼の「文学の造詣、文学鑑賞の仕方は、シンシナチやニュー・オルリンズの新聞に筆をとっていた時代に出来たのである」(エスプリ30)。

27日(水)。「馬の末路」。以下、ハーンの作品で(小)動物がタイトルに出てくる記事等、あるいは焼津で体験することとつながりそうな作品をピックアップしてゆく(すべてが発掘され公表されているわけではない——発掘を待っていると西崎論考が示唆、エスプリ23以下参照——)ので、網羅するのではない)。

1873 明治6年。9月4日(木)。「模範的家畜飼育場」12月31日(水)。「動物崇拜」

1874 明治7年。3月8日(日)。「野蛮床屋」。おしゃべりな床屋と会話体で人々の生息がユーモラスに描かれる。アイルランド出であることを見抜かれた記者は、大きな声で「どこの国の出だろうが、あんたの知ったことじゃないだろう」と言い捨てるとき、移民の置かれた不安定さが見てとれるとマレイは指摘する(69)。剃ってもらった記者の、「新しく刈り込まれた頬ひげは、収穫期の切り株畑さながらであった」。

15日(日)。「床屋にはいささかも悪感情はない旨の記者からの一言」

6月7日(日)。「女の眼」

14日(日)。州法を犯してマティと結婚。

7月19日(日)。「シンシナティ東部の野良犬」

1875 明治8年。5月1日(土)。「最近の動物園秘話」「へび対とかげ」

7月。日不詳。インクワイアラー社を突然解雇される。自暴自棄になり、身投げしようするが果たせずとも、芝居がかった冗談とも言われる(スティーヴンソン86)。

8月上旬。シンシナティ・コマーシャル紙に寄稿開始。

10月24日(日)。「小鳥店での夢想」。鳩と蛇の神秘の歴史という副題で、ハーンのぞっとするような、怪奇趣味的なエッセー。

1876 明治9年。1月16日(日)。「動物園のイヌ科動物たちの集落」

3月12日(日)。太政官通達第27号により、公務を日曜日に休むことになる。4月から官庁は日曜休日、土曜半ドン。これにより人々の生活で曜日が意味を持つことになったが、日常では曜日がしばらく重要視されなかつたらしく、たとえば明治30年

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

8月八雲初来焼時の静岡民友新聞には曜日が記されていない。

17日(金)。「堤防の生活」。社会の底辺に生きる人々——荷揚げ人足ら——のスケッチ。下層庶民への眼差しと河、労働、生活の唄の挿入紹介は、日本時代の創作手法に通じる。

4月24日(月)。「馬のよもやま話」

5月9日(火)。「蝶の幻想」。「目に留まった日本の蝶の一つに、深紅と淡い空色にかすかに白の混じった羽の具合が、日本の扇子によく見る空の意匠とそっくりなのがあった」という文章がある。

6月。セツは「明治九年、八歳四ヶ月で小学下等教科の六級に進級した^{のち}後、九歳十一ヶ月で五級に進むまで、進級が止まっている」(妻176)。**養父金十郎の事業失敗**、一家の城下町外れへの転居と長谷川は見立てる(妻同)。

6月4日(日)。「わが馬術愛好家たち」

27日(火)。「堤防の子供」

7月27日(木)。「血を飲むことと動物の寄生虫」

10月26日(木)。「野生の花の研究」

1877 明治10年。6月3日(日)。「ライオンの叙事詩」

ニューオリンズ時代1877・10～1887・6

10月頃か。マティ(アルシア)との結婚生活破綻。事実上別れる。「アルシア・フォーリーと離婚した一因には、料理が口に合わなかったことがあったという」(ユリイカ83)が、そんな皮相なことではなく、もっと内面的な理由があったことを、日付なしのワトキン宛の手紙が示している(絵入14番)。

日付不詳(10月?)。シンシナティを離れる。貯えも仕事の当てもない無謀な旅立ちであった。こういう絶望的な企てをしなければならなかったほど、彼は心機一転を必要としていた。

メンフィス(「あたり」田部123)の町の路上で子猫を虐殺する男に、怒りから銃で撃つが一発も当たらなかったというから、ピストルを持ちながら旅をしていた(へるん27・96アトキンソン宛1903・1・10付で My best friend was a revolver kept to me in case the doctor failed. とある)。そのころはいつも銃を持っていた(田部124)。また、在米時に、狂犬の疑いのあった犬をピストルで射殺したことがあった(一雄485)。「毎夜枕の下に旧式な大型の拳銃を置いて寝ていました」と一雄は父のことを記している(79)が、これはアメリカから持ってきたのだろうか。

10月31日(水)。メンフィスからワトキン宛。宿泊先のこと、マティへの自責の念、目の痛みについて述べて、最後に、内面を打ち明けている。「あなたは |手紙を|よく書いてくるなど考えはじめていることでしょう。私もたびたび書いているなと思います。あなたはその理由もおわかりです。たぶん、こう思っておられる。『彼はいま少し憂鬱になっているな。それでとても懐かしくて思っているのだな。だが、だんだんにまったく忘れてしまうだろう。やがて今のようにそう頻繁には手紙は書かなくなるだろう。』と。そう、そのとおりだと思います。私はいま極端な状況のなかで暮らし、またそれを糧にして生きています。私は極端なほどたびたび手紙を書きました。なぜならば、孤独だからです。それも、極端に孤独だから(…)」。絵入によると、この頃は10月28日、29日(この日は2通)、30日、31日、11月3日と立て続けにワトキンに書いている。それから次第に間が空くようになる(11月13日、15日、30日、12月3日、9日、1月13日)。ここにはハーンの手紙執筆の動機の一つがはっきりと打ち明けられていると同時に、マティとの暮らしが**大きな失敗体験**でショックだったことを示す。

11月12日(月)。ニューオリンズ到着。綿、砂糖の町。無花果が甘いところである。コマーシャル紙に送稿するも送金なし。取材と職探しに走り回ることになる。中旬。ニューオリンズで、現地のクレオール人の生活習慣、信仰、料理、諺などの研究をして、執筆活動をしていこうとする。

23日(金)。シンシナティ・コマーシャル紙に「メンフィスからニューオリンズへ——ミシシッピ川下流印象記」。

1878 明治11年。

2月頃。クレイビール宛「もっと南方の国——西インドか南アメリカに行くのでなければ、……ニューオリンズを去るつもりはありません」。

4月下旬。コマーシャル紙の通信員を解雇される。骨痛熱(デング熱)にかかり、餓死寸前の困窮状態。

6月3日(日)。ワトキン宛。「イチジクが木に実っています。しかし、私はそれを食べられるほど長くは当地に滞在しないでしょう」(絵入)。

6月14日(金)。ワトキン宛。コマーシャル紙を解雇されてすっかり落魄の身となり、「二日に一度、5セントの食事をとり——夜になっても、明日はどこに泊まろうかと案じている始末だ」。

15日(土)。ニューオリンズ・アイテム社に勤務開始。

23日(日)。推定。ワトキン宛。**文学的野心**が捨てきれない、一つの仕事に辛抱できな

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

- い自分の性格、他人にこき使われるのが大嫌い、**独立**を目指して失敗したこと、**熱帯航路**の船に乗り込む望みなどさまざまなことを8頁の長文で伝える（絵入）。
- 6月（推定）。クレイビール宛でアイテム紙に職を得ての一日の暮らしぶりを知らせる。朝早く、レストランで25セントくらいかけて、イチジク一皿、ブラック・コーヒー一杯、クリーム・チーズ一皿、コーン・マフィン二、三個、それに玉子一個。（…）仕事を終わると、午後は**水泳**をしたりしてのんびりくつろいで過ごす。
- 7月。日不詳。クレイビール宛「堪らなく嫌な暑気の埋め合せをするものが唯だ一つあります——無花果です、素敵に冷たくて、甘くて、汁ぼくて、そうして柔らかなのです」。
- 10日（水）。ワトキン宛「ヨーロッパ行きのお金を作るために、死にものぐるいで働いています」。これは放浪の憧れの表明である。
- 11日（木）。「昆虫の政治学」。**アリの社会**を想定して、人間社会と同じような政治対立を夢想している。この小品では、後の「蟻」（『虫の研究』）でのように、個人と社会という対立は出てこない。
- 13日（土）。「海へビはウナギなりや」。1890・12佐陀神社の**竜蛇**への関心に通じる考察をしている。
- 8月6日（火）。「海の怪獣」
- 14日（水）。ワトキン宛の10枚の長い手紙で、キューバを見たいとか愉快的な**放浪の旅**をしたいと記す。さらに「私はたびたび泳ぎに行きますが、水は恐ろしく温かです。湖はまるで底に地獄の大釜が据えられているような感じなのです」。
- 9月（絵入で推定）。ワトキン宛で、ニューオリンズに来て、一緒に暮らし、何か商売でもはじめて一緒に楽しくやっといこうと書く。「キューバへのひとつとび」「中華料理屋で食事をし、目のつり上がった、黄金色の肌をしているマニラ娘に給仕をしてもらう」（恒文社著作集書簡Ⅲでは8月14日）。
- 9月16日（月）。「水とパンだけの食事」
- 月日不詳。クレイビール宛「誰にも彼にもそれぞれ自分の**内的生活**があります（…）私達はみんなドッベルゲンガー（二重生活者）ではないのですか？そうしてその見えないものこそ、私達の真実楽しんでいる生活ではないのですか？」。
- 1879 明治12年。2月下旬。一食25セントの安い中華料理店で食事して生活費を切り詰める。北部出身の仲間と「不景気屋」を開業。「かつては在米中一品料理屋を開業したことさえあった父です」（一雄356）。過労、目の酷使、人に使われる不

自由さ、病気などのため、安定した収入と独立が欲しかった。

2月下旬。クレイビール宛「来週からは自分で少し商売を始めるつもりです。好い相棒がいるのです——北部の人ですが——で春までには南アメリカに出かけることが出来るだけの現金を儲けるつもりです」。この手紙ではホフマンを仏訳で読んでいる、広告を出さない風変わりな中華料理屋、熱帯地方からの呼び声のことなどを記す。

27日(木)。ワトキン宛。「大がらす [絵] は近くキューバに落ち着こうかと思っています。2、3ヶ月後には下検分に行くつもりです。——もしも運命の女神がほほえんでくれたならですが。(…) 凶暴な大男で、コーヒーがまずいという客を殺しかねない相棒に裏切られるのではないかと絶えずびくびくしながらやっている」。

月日不詳。クレイビール宛で眼の過労を記す。

3月10日(月)。「猫に課税を」。猫に課税する話が、猫と女性の話に移っている。

上旬。クレイビール宛。食堂経営者になって、コーヒー、ホット・ロールパン、スープ付きステーキ、コールド・タングのシチューを安く売っていると知らせる。

23日(日)。相棒が売上金を持ち逃げ。不景気屋閉店。多額の借金を抱える。

6月。セツ、満11才5ヶ月。内中原小学下等教科卒業(事典218)。「勝気であったので学校の成績も悪くなく(…)退学を強いられた当座は一週間泣き続けたとか」(一雄2・142)。

9月24日(月)。「小さな赤い猫」。「その小猫は、見ようによっては、ちょっと赤いライオンの仔みたいに見えた」。

10月5日(日)。「蟹はなぜ生きたまま茹でるか」

11月24日(月)。(推定)。ワトキン宛の手紙で一日の暮らしぶりを紹介している。「朝は早く、日の出とともに目を覚まし、コーヒー一杯、パン一切れを呑み込みます。編集室へ出かけて、『アイテム』紙に載せる戯文をひとひねり、それから下宿に戻ると、窓は蔦葛と蚊柱で薄暗く陰っておりまして、そこへスペイン語の先生がいらっしゃる。次に中華料理屋へ出かけ、ご馳走をたらふくいただきます。大鳥めの栄養感覚は、異常に発達しているのでございます。その後二時間ほど古本屋をまわります。それから、いったん床に就き、まわりが寝静まった真夜中にむっくり起きると、パイプを燻らせます。葉巻をやめてから、はや一年、大鳥の品行はまったく模範的でございます」。

1880 明治13年。1月下旬。クレイビール宛「私はまだ十分に眼がよくありませんの

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

で余り仕事が出来ません (…) スペインの船舶がコスタリカや、西印度諸島から入ってまいりますと、何となく**焦燥の心**に襲われることが折節あります。いつか私はぶらりと岸壁に下りて行き、船に乗り込み、そうしてどことも知れず去ってしまう日があるように想うのです」。

7月8日(木)。「食道楽に告ぐ！」

月日不詳。クレイビール宛「文学的材料、太陽の色、熱帯の色取りなどを得るために夏に**メキシコへ旅行**できればよいと思っています」。

1881 明治14年。

2月。日不詳。クレイビール宛「私は荒れたクレオールの家に住んでいます。(…) 色々な植物や仙人掌の生えてある大きな花園、それに夢を見ているような一頭の馬、四匹の猫、二匹の家兎、三匹の犬、五羽の鷺鳥と、^{シラグリオ}一部屋の雌鶏——皆一緒に仲良く棲んでいます」。

10日(木)。乙吉家督相続。この頃乙吉の父死亡。妻きせはこの年に嫁してきた。「落ち着いた女性」「正直者」「焼津の人にしては色が白く、黒い頭髪が西洋婦人に見る如き波状を呈していました」(一雄314)。

日不詳。クレイビール宛「ニューオーリンズもつくづく厭になりました。それが生じた最初の愉快的印象は消えてしまっています」。

月日不詳。クレイビール宛「来年になりましたらこのこわばった妙な古い街の一つにフランス書を商う小店を開くことが出来そうなつもりでいます」。経済的に自立してやって行きたい気持ちが依然としてあった。

4月1日(金)。「猫と犬の話」。子猫を奪われた親猫が別の小猫を育てるとか、犬猫に人間にも通じる忠誠を読み取っている。

5月21日(土)。「女と馬」。すばらしい競走馬、優れた運動家、それらと共通する肉体上の美点をすばらしい女性の身体の動きに認めるというエッセー。

6月14日(火)。「鳥と少女」

10月4日(火)。「昆虫の文明」。アリの脳の存在をもとに知力を論じている。「人間は下等動物にいつそうの関心をもつようになり、より優しい心で彼らに接するようになるだろう」。

12月28日(水)。タイムズ・デモクラット紙に文藝部長として迎えられる。

1882 明治15年。7月7日(金)。ワトキン宛。生活も安定し、貯えもでき、蔵書も300冊になった、「本屋でもやってみようかという野心があります」、東洋の思想哲学、古代インドの詩歌を勉強していると知らせる。ここでも**安定した生活**への

希望が漏らされている。

8月27日(日)。「アリの消息」。アリについての最近の発見と、文献知識に基づいて、アリの知能、奴隷制、道徳律、倫理的原則、労働、言語、娯楽、戦争などを紹介、人間滅亡後のアリ文明を夢想する。

1883 明治16年。1月14日(日)。「猫の研究」

3月4日(木)。「近視」。近視の増加とその対策を論じる。

12月。日不詳。クレイビール宛「何か一つの題目に専門家として成功するには私はいつも余りに無学であるにちがいません。(…) もう一つ大きな苦悩は**旅行が私には出来ない**ことです」。

1884年明治17年。2月4日(月)。乙吉の長女てつが生まれる。

8月28日(木)。コートニー夫人宛。グランド島で毎日三回泳ぐ。この夏ハーンは1ヶ月余り、ニューオリンズから小船で行き、グランド島(ミシシッピ川とカリブ海の間)で過ごし、15年ぶりに海に入った。「チータ」という物語がこの避暑休暇中に彼の想像力の中でゆっくりはぐくまれた(年譜)。

9月。日不詳。コートニー夫人宛。毎日**魚料理**ばかり食べているので肉料理が恋しい、雨が降ったら鳴きだす蛙の大合唱の擬音などを記す。

日不詳。ページ・M・ベイカー宛「私は十五年間**海の水**から離れていたのです。私が海の中でどれほどの喜びを味わっているか、あなたには想像もできないでしょう。なにしろ、私は海から一步も離れないのです。(…) 私は水に融けこんで、一緒にのんびり流れてゆきたい(…)」(第一、事典118)。

10月。日不詳。クレイビール宛「{クレオール群島では} 易々と島一番の上手なものに泳ぎ勝つことが出来ました」。

12月16日(火)。**万国工業兼綿花百年期博覧会**が半年間(事典163では翌3月にかけて。黒田では、まず綿花博覧会が開かれ、翌年11月から翌々年3月までアメリカ博覧会に引き継がれたとある)ニューオリンズで開催。ハーンは取材に出かけ、日本政府派遣代表者服部一三——年がハーンより一歳若い——にほぼ毎日のように尋ねた。10の部門のうち教育関係が8部門であったから、力点がどこにあったかが分かる。

この博覧会の日本語表記は統一されていなくて様々であるが、太政官布達第八号(明治17年4月)によれば、「万国工業兼綿百年期博覧会」であり(へるん26・53)、終りも翌年5月31日(へるん28・24)とも記される。

1885 明治18年。焼津市誌によると、この年の組合戸長役場調査では、

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

	商業	工業	漁業	雑業	合計	人口
北新田村	32	4	141	15	192	950
城之腰村	193	12	130	81	416	2008
鯛ヶ島村	82	15	180	48	325	1542

北新田と鯛ヶ島は漁業、真中の城之腰は魚商人の商業活動で金が動く。山口乙吉の住んでいる城之腰村が最も人口が多く、一番にぎやかだった。

1月。日不詳。クレイビール宛「いつか実際真面目に医学を研究してみたい気がしないでもありません。(…) 医者になれば**日本**へ行っても相当な成績をあげられるかも知れません。私は本気にそれを考えています」。

31日(土)。「ニューオリンズ博覧会——日本の展示物」。古美術、布で作った虫や爬虫類、絹布に描かれた富士山などが言及されている。

3月7日(土)。「ニューオリンズに見る東方の国」。日本の教育文献の出版事情などを語る。

28日(土)。日本の古楽器類などについて「ニューオリンズ博覧会——東洋の珍しい品々」。古代ギリシャと現存する日本音楽との類似性、教育玩具などについて述べる。

6月27日(土)。(絵入による)ワトキン宛。「**日本**についてまた勝手な想像を始めています。日本には素晴らしい活躍の場があります。〈少女を雇うのに、月あたりたったの6ドル50セント。少女たちはとてもきれい〉。気候はちょうどイングランドのようです——おそらくもう少し穏やか。ヨーロッパ人がたくさんおり、英仏独の新聞もあります」。日本についての関心を語っているのが重要である。なお、この手紙の日付を田部は1879・6・27としている(田部138)。これは、ハーンの日本行きが偶然の成り行きではなく、前からの計画であることを思わせる手紙である。

7月16日(水)。オコーナー宛。「私は東フロリダに滞在しました。そうしていろいろの印象を求めて、大分出歩きました。あの驚くべき水が殊に私を誘惑しました。私は**水泳**が上手です。そうしていつでも無暗に泳いで見たくて仕方がないので、銀の泉の誘惑に負けてしまったのです。非常に暑い日でした、がその水は氷のように冷たかったのです」。

この年、セツは15才。「母が娘時代の辛かった思い出(廃藩置県から起った士族階級の家庭における種々の悲劇)を話す出すと、父はいつも『もういいない。よき私の○○縮まります』と申して、これを阻止しました。苦勞話は極力避けて、

楽しかったことや可笑しかったことをのみ家庭の者達へは聞かせようと努めていました」(一雄62)。

1886 明治19年。この年、**小花貞三**は単身上京、しばらく同人社に学び、後に大学文科の哲学選科、その後英文学選科、間をおいてまた英文学選科で学ぶ。三歳年下の上田敏とも親しく、ハーンの英文学講義に深い影響を受けた(へるん27・89)。

1月24日(日)。「眼の移植」。視力回復のための移植手術報告。

2月12日(火)。乙吉の長男**梅吉**(二代目乙吉)が生まれる。

日不詳。クレイビール宛「私は一つの願望の実現に向かってこつこつと働いています——新聞記者生活を脱れるためにです」。

4月。日不詳。オコーナー宛。「総ての世界の生命はそれから発出したと言われる深淵——あの造化の広大な塩の湾——は猶その神秘的な力を有っているように思われます。聖霊 the Spirit がまた海の面 the Face of the Deep を徘徊しています——そうして大洋があゝの息が血液に新しい魂を与えます」。

7月上旬。単身約一ヶ月グランド島で遊ぶ。その間に「チータ」第一部の原稿完成。

9月。日付不詳。クレイビール宛「当地の冬の久しい間の湿気と薄寒さが体にこたえて来ています。生活は気楽ですけれども大分私は弱ってゐます。でどこか海辺へ行ってみなければなりません」。

10月。日不詳。クレイビール宛「冬ですね。考へても私の蜥蜴の血は氷ります。私の室では七十一度 {摂氏21・6度} です。私達には七十一度が**寒い**のです。冬のニューヨークは私のやうな人間に取っては全く壊滅です——永遠の暗と蛆 eternal darkness and worms です」。

11月30日(火)。戸籍謄本の記載では19才の稲垣セツは前田為二を婿養子に迎える(事典218、生活記21。妻48では18の時)。為二は1858 安政5年9月22日生まれ(一雄2・152)。

1887 明治20年。1月早々、大崩トンネル(小浜トンネル。長さ967メートル)着工。「下り列車が静岡駅を発してこの隧道を出ると間もなく相当長い鉄橋の架^かっている瀬戸川に差し掛かる」(一雄425)。この川で取れた鰻を八雲や一雄たちは、後に焼津で食べることになる。

日付不詳。グールド宛で放浪生活への憧れを語る。「ところで私はどこへ参っても落ち着けないと思います。どこへでも行って見て、できるだけ長く**流浪生活**をするのでしょう。見知らぬ土地へ行つて——まだ少しも競争者のできないうち、少しも悪意を起こさせないうち、何人の不快も招かないうちの、その土地の人たちと

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

の最初の関係は何とも言えない愉快なところがあるものです。一つのところに相当に永住しますと、その幻覚がなくなってしまいます」。

5月末。セツの実父小泉湊没（妻52）。稲垣為二はセツを捨てて大阪に出奔。

6月。クレイビールと一緒にハドソン川を遡ってハイキングをしたり、一人でコニーアイランドで水泳と7月1日(金)付マタス宛で記す。

マルティニーク時代1887・7初旬～1889・4

7月3日(日)（推定）。ニューヨーク港からハーン出発。9月上旬まで西インドへの旅。二年も住み着いてフィールドワークを行うということは、当時ではまだ人類学者でも行っていなくて、画期的なことだった。

このマルティニークの時期はハーンが、新聞記者をやめてしまい、小説家になりたいと思いつつ内的挫折を感じ、苦悶していた。

1903年1月10日(土)付、異母妹のミンニー・アトキンソン宛で（へるん27・96以下）では、この間の事情を説明している。私は「堅実に暮らし、給料を書物に費やした。そうして、私の教育の不足を補うことができた。スペイン語も勉強した。私は毎日数時間の仕事をすればよかった——勉強の時間は一杯あった。小説や他の本も書いた。それらを文学界は認めてくれた。それから私はいやになった got tired —— 気候がいやになった、—— 毎日毎日が同じで何も変わらないのがいやになった、—— {数回にわたる疫病で} 死んで行くゆく私の知り合いたちを見るのがいやになった、実にわずかな成功をがやがや言うけちな嫉妬にいやになった、—— 地位を放り出して、西インドへ行った」。

9月上旬。マルティニークから戻りニューヨークへ。

29日(木)。ビスランド宛で、「私は全くクレイビールに逢えずに終わりました——私の戻った時は市にはいられなかったのです、そうしてその後はお暇がなかったものと思われます」。事典197によれば、マルティニーク出発直前に些細なことでハーンの自尊心は傷つけられ、その後交際途切れた。こういう風にハーンは知人と交際をよく断っている。

10月2日(日)。また西インドへ向い、12日頃着。西インドで三十余匹の猫を飼っていたほどの猫好きの父（一雄154）。

1888 明治21年。4月（日不詳）。「チータ」が「ハーパーズ・マンズリー」に掲載（事典374だけは「ハーパーズ・マガジン」）。この小説では、**子供が泳ぎを覚える**喜びが描かれていて、ハーン自身の体験の反映であるかと思われる。杵築や焼津で一雄たちに熱心に泳ぎを教える彼は、チータとあまり穏やかな教え方はしない

父フェリウに先行例として示されているようだ。神経質で華奢なチータはめきめき健康を増進した。

6月14日(木)。グールド宛で、自分の性格と放浪性を語る。「私はとにかく同じところにいると飽きがちです(…)滞在の期が長くなればなるほど次第に目立って辛抱の出来なくなる不快な事実が嫌になりがちなのです。ですから結局きっとどこかよそへ放浪することになります」。

8月頃(年表推定)。グールド宛。自分の近視についての質問で、失明した目とその原因、醜い容貌、近視のため肉体運動の喜びを味わえないが、水泳だけは得意であるとか父母のことなどを記す。

9月12日(水)。5月頃から準備していたプレー山(1397メートル)登山。朝4時写真家レオン・シュリーらと馬車で出発(作品「プレー山」では朝5時サン・ピエール出発とある)。山麓にある友人のところで馬車を捨て、運動着に着替える。砂糖きび畑の労働者の先導。11時頃頂上近くのクレータに着き泳ぐ(年譜年表では、11時半頃に山頂到着、眺望撮影、噴火口でひと泳ぎ)。「湖の水は全く澄み切っていて、底は黄ばんだ浅い泥である。その泥は——1851年の調査によると——所々鉄分を含んだ砂と混じって、軽石の厚い層の上に乗っているの、その黄色い泥もまた軽石の岩屑である。我々は泳ごうというので衣服を脱ぐ。この水は、約5000フィート{1524メートル}の高地なのに、ロクスラーヌ川の水ほども冷たくもなく、西北および東北海岸の他の川の水ほども冷たくもない」(「プレー山」Ⅷ)。1時頂上着(年譜)。年表では、1時に雲が出てきたため下山開始。帰路、毒蛇に注意し、200回以上転倒の難路。写真は失敗。夜9時過ぎに町へ降りる。「おいおい、シリア、雲に触るなんて、わけないんだぞ。プレー山のとっぺんにはいつも雲がかかっているだろ。神様じゃなくたって山ぐらい登れる。僕はあそこへ行ったんだ——雲の上までね」(「わが家の女中」)。

9月19日(水)。「プレー山」脱稿。

1889 明治22年。3月7日(木)。乙吉の二女さきが生まれる。

4月1日(月)。北新田村、城之腰村、鯛ヶ島村(この三村は南北約千メートル東西約二百メートルの細長い地に連なっていて、非常に狭い)をはじめ12カ村が合併し、**焼津村**が誕生。旧三カ村で人口の過半を占め人口密集地であり、他は人家もまばらな農村地帯。城之腰は北から御休町、蔦町、仲町、十一人町、札之辻の五町で、山口乙吉の家は北新田に接する御休町の中央の道路沿い西側(「八雲」3・28)である。それらの町名は小字でもあるが、さらに十一人組、仲宿、蔦組の小字があ

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

る（市誌7）。

焼津海岸は古地図ではもっと沖合いまであったのが、海岸侵食で「約百メートル余り」（市誌5）減ってきていた。

16日（火）。東海道線静岡・浜松間開通。当時テイシャバと呼ばれた焼津駅が字中村に開設された。新橋から静岡までは6時間32分。当時としては大変な速度である。焼津の漁業はこれによって、天秤棒での販売範囲から一挙に東西大市場と結びつき、大量輸送、大量販売の時代になった。

5月1日（水）（年表推定）。ハーン、この時まで西インド滞在。サン・ピエールを発つ。

フィラデルフィア・ニューヨーク時代1889・5・8～1890・3・8

7月1日（日）。新橋・神戸間全通。料金。静岡・新橋間は下等1円20銭、中等はその2倍、上等はその3倍（当時は米一升つまり1・5キロが6銭4厘であるので決して安くはない）。

9月下旬（推定）。ビスランド宛、熱帯地方は魅力はあるが、「そこでは仕事ができないという所信なのです、——絶えない熱と眠った空気の中に記憶も意思もぼんやりして働かないのです、そこを去る前の三ヶ月間は一行も書けませんでした、（…）今度は東洋へ行ってみてはと友人たちは言ってくれるのです、で行ってみようと思います」。

10月（絵入による）。ビスランド宛。『ハーバース・マンズリー』に自分の肖像が載ったことに怒りを覚えたこと、「私はとくに、仕事のごたごたに縛られ、情報を持つ必要にせめつけられて——困り果て、まごつき、不確定の計画に言いようもなく不安で——寒さにふるえ、**熱帯**を恋しがっている——そういう状態なのです。——私は生涯寒さに悩んできました。——心理的な、そして肉体的な、あらゆる種類の寒さに。私は寒さが嫌いだ！！！！」

1890 明治23年。1月。セツと為二との**離婚**正式受理。事実上の離婚はこれより「一兩年前」（一雄2・162）。セツは結婚に破れた気の毒な出戻りで、そして士族の親孝行な機織娘となっていた（生活記22）。セツおよび家族親族は**困窮**の極みにあった。

3月8日（土）。挿絵画家C・ウェルドンと共に日本に向けてニューヨーク出発。

11日（火）。『仏領西インド諸島の二年間』がハーパー社から出る。ハーンの日本滞在は、アンティュー諸島（マルティニークがその一つである列島）滞在に連続しているとも言える。「彼はアンティル諸島においても日本におけると同じように、全面的に変貌を遂げつつある一つの社会の中で生活した。すなわち、有色人種の

前に白人が急速に後退していく場面に立ち会うのである」(ド・スメ73)。マレイはこの書を日本時代の著作の形式の原型であるとする(54)。

18日(火)。バンクーバーから日本に発つ。ハーンは船酔いに強かった。大荒れの時は、甲板の物が洗い流された。水夫さえ酔った。平気で食事の催促をするハーンに船の者が驚いた、とセツは聞かされた(セツ42)。

引用文献および参考資料 最後の括弧内は略号。紙幅節約のため執筆者名はすべて省略。また敬称も略させていただいた。旧漢字は再現できないことが多く、やむを得ず新漢字にせざるをえないことがあった。

ラフカディオ・ハーン著作集。第十五巻。恒文社。1988(年譜)。

同著作集。第14巻。1992。

坂東浩司：詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝。英潮社。1998(年表)。

平川祐弘監修：小泉八雲事典。恒文社。2000年(事典)。

小泉八雲：わが家の女中(平川祐弘編：クレオール物語所収。講談社学術文庫)。1991。

小泉八雲全集第9～12巻。第一書房。昭和2年(第一。この書簡は、原文と比べると省略があったりするが、その明示がないという問題があるほかに、訳文がいかにもぎごちない)。

関田かおる編著：桑原春三所蔵 知られざるハーン絵入書簡——ワトキン、ビスランド、グールド宛 1876—1903——。雄松堂出版。1991(絵入)。

八雲会編集：小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集 第二巻 未刊行書簡。雄松堂出版。1991(拾遺集)。

Elizabeth Bisland(ed.): The Life and Letters of Lafcadio Hearn with illustrations in two volumes. Houghton, Mifflin and Company 1906(Bisland).

Elizabeth Bisland(ed.): The Japanese Letters of Lafcadio Hearn. Houghton Mifflin and Company 1910(Japanese Letters)

Sanki Ichikawa(collected and edited): Some new letters and writings of Lafcadio Hearn. Kenkyusha 1950.(市川)

E・スティーヴンソン：評伝ラフカディオ・ハーン。遠田勝訳。恒文社。1984(スティーヴンソン)。

ジョゼフ・ド・スメ：ラフカディオ・ハーン——その人と作品。西村六郎訳。恒文社。1990(ド・スメ)。

焼津から見たラフカディオ・ハーンと小泉八雲

ポール・マレイ：ファンタスティック・ジャーニー——ラフカディオ・ハーンの生涯と作品。村井文夫訳。恒文社。2000（マレイ）。

田部隆次：小泉八雲。北星堂出版。昭和25年（田部）。

河島弘美：ラフカディオ・ハーン 日本のところを描く。岩波書店。2002（河島）。

小泉節子・小泉一雄：小泉八雲「思い出の記」「父『小泉八雲』を憶う」。恒文社。1989（それぞれセツ、一雄）。

小泉一雄：父小泉八雲。小山書店。昭和25年（一雄2）。

長谷川洋二：小泉八雲の妻。松江今井書店。平成2年（第二刷）（妻）。

梶谷泰之：へるん先生生活記。恒文社。1998（生活記）。

北山宏明：小泉八雲と焼津。小泉八雲顕彰会。昭和43年（北山1と略）。同改訂増補版。昭和63年（北山2）。

新村日新：郷土読本 八雲賛歌と神様の里 焼津——焼津にて、小泉八雲——。山西郷土教育同好会。昭和60年（新村）。

八雲会：へるん。1—39、別冊/1990（へるん）。

小泉八雲顕彰会：八雲1—14。昭和63—平成14（「八雲」）。

現代のエスプリ。小泉八雲。No.91。至文堂。昭和50年（エスプリ）。

太陽 特集明治は遠く…。No.66。平凡社。1968・12（太陽）。

ユリイカ 増頁特集ラフカディオ・ハーン。青土社。1995・4（ユリイカ）

黒田晴之：ラフカディオ・ハーンと世界システム——かれのクレオール音楽との関係を中心に——。Angelus Novus 29。2002（黒田）。

焼津市誌編纂委員会：焼津市誌（上巻）。昭和30年（市誌）。

焼津漁業協同組合：焼津漁業史。昭和39年（漁業史）。（市誌、漁業史とも志太郡誌等での年号などの誤りをそのまま引き継いでいて、これがさらにへるん35・43で引き継がれたりしているので注意が必要）。

釣陽一：和洋暦換算事典。新人物往来社。1992。

静岡民友新聞マイクロフィルム。静岡市立図書館、静岡県立中央図書館所蔵。

（民友）

枕流亭：枕流亭の由来。（パンフレット。2002年8月入手）。

焼津ホテル：うつろいて波まくら。（パンフレット。2002年8月入手）。